プロレタリア通信
1959. 9. 23 No 19 共産主義者同盟

国鉄でなにが必要か

合理化反対斗争の経験について（I）

(1) 裏切ったのは動力車労組だけではない。

二一、二二日、動力車労組は組合結成以来はじめて、戦後最大の実力斗争、各地本・機関支部一つの十割休暇斗争に突入するはずだった。

二二日のダイヤ改正を目の前にし、合理化五ケ年計画、動力近代化十五ケ年計画による、杉関区の全廃、蒸気機関車の全廃に直面し、尾久杉関区五百名の労働者に六一名の定員減をはじめとして、労働条件の物凄い切下げ、配転の中にいる動力車労組の労働者は、二〇日の夜から機関支部の斗争支援に集まった。

東京品川杉関区へ集まった三百名の労働者は、二二日の動力担当の乗務員を引き抜き旅館へ隠し、二二日斗争の体制を完全に組んだ。

ところが、そこへ中斗が「斗争中止指令！」をもって来た。

五つの主要求、

① ロングラン（長距離乗務）反対、
② 動力時間の延長、休暇短縮反対、
③ 検修回送（列車の検修をする貨物、これが増える）増加反対、
④ 二人乗務廃止反対、
⑤ ディーゼル機関車の乗務時間五時間四五分を電動車なみ（五時間三〇分）にしろ。

以五を除いては何一つ解決されてないというのに！

中斗はものすごいヤジ、地本を先頭にした怒号とつきあの中で、一ゆたり説明し、歌を歌わせて、解散させた。しかし手を振って歌を歌ったのは彼等だけ、一の労働者はそっぽをむいていた。

翌日一日中、尾久でも品川でも、杉関区では怒りをまいていた。

戦後最大の斗争、処分覚悟の斗争の結果はこれだった。しかし裏切ったのは動力車労組だけではなかった。

二一、二二日、国労は「順法斗争」による支援だけきめなかった。ダイヤ改正は国労の全乗務員に対する労働強化だし、これまで孤立して斗いぬいて来た所、十月二日に鹿山という決戦段階に突入しているのに、田端運転区でも九十名中六十数名の配転、品川の三名の配転、上野駅十数名の清掃の民間委託と山手線だけでこれだけ合理化が進んでいる（今年一杯実施）のに、その全体としての斗争方針はまるでなく、何いは、地本、支部が「はじめやる」と云って、決定的でなければひっくり返るのが、いやという程くり返された。

(2) 五ケ年計画は国鉄労働者をドン底にたたきこむ。

五ケ年計画とは何か？

昭和二十年、至済自立五ケ年計画によって、日本独占が、当面の日本独占資本の「三大猛路」、鉄鋼、電力

医の強化に最大限の努力を注ぐことが要求され、国家財政の運用の下にこの部門の強化がおしすすめられた。国鉄五ケ年計画はこのとき頃物、旅客輸送の増大のために立案された。

しかし、三の年、三一年の日本資本主義の　　的な拡大のなかで独占資本は、二のような案では目的が低すぎるとして三二年三月、今日の五ケ年計画が決定された。

計画は、三一年比旅客一三九%、貨物一三四%へ輸送量を増大させ、運転回数を幹線で三〇～五〇%、支線で五〇～一〇〇%増加させることを目標とし、五九七億の投資を五年にわたって行なう（三〇年計画では五〇二億）。計画の内容は、①老朽車両更新、信号保安強化、②輸送力増強、③輸送方式近代化と云い、実際は、電化と複線化を中心とし、進め方は、五年の前半に、貨物の緩和、保安の確保を中心にし、設備投資は車両、列車設備、信号保安にとどめ、二の間に生産性を上げ、自己資金を出来るだけ多く蓄積し、大量の投資を必要とする線路の設備・拡張（複線化）は後半にまわす方針だ。

計画は方針通りにすすんでいる。

電ム区（電話、電報を扱う）の合理化（新杉機等人）の合理化は、中心電ム区（東京、大阪、名古屋、札幌、新潟など）ではすでに終った。

電化・ディーゼル化は予定通りすすんでいる。

公社は、経営の向上を大幅に追求している。支局制設置による各地方ごとの独立採算制の強化、非採算部門（被服工場など、志免もその一部）の整理、統合、払下げが行なわれ、新採用が停止されている。

五ケ年計画は、時間的にはおくれており、七年位かかると本省でも云われている。計画の後半に予定されている線路部門の合理化（複線化）は、東海道新線の計画以外はほとんどすすんでいない。

しかし、今、電ム関係、施設関係の合理化から、杉関区、貨・客車区関係へすすんで来た合理化は、いよいよこれから本格的な段階へ入る。

これまで労働者は「配転」でまっこうからの直切りはごく少数しか受けなかった。

しかし、五ケ年計画が終ったら10万人の首切りだ、と云うことは、当局は公然とは決して云わないが、組合では既定の事実のように云っている。

合理化反対斗争は、決定的な段階へ一歩一歩近づいている。

どころが今日まで、合理化反対斗争はどう斗われたか。

どこで敵の合理化計画に大打撃を加え、斗争の基本的教訓をくみ出せるような斗いをしたか。

あったものは、志免売山反対斗争に最も典型的にみられるように、下部労働者の徹底的な斗争と、民同幹部のウラギリによる敗北だけだ。

そのウラギリ性は、まず、合理化のとらえ方において明らかにされている。

彼らは合理化を「合理化そのものは社会の進歩をもたらすが、資本家（とくに独占資本）がそれを自分の利益のためにやっている」と云う。

彼らは、資本主義社会で、資本家の利益をはなれた「国民の利益」になる合理化があるなどと云う。

これは全くのウソ、労働者階級の立場を離れた小ブル的非階級的見解だ。

合理化は、たしかに「国民の利益」、正しくはホンブル大衆の利益を侵す場合があろう。零細な旅客運賃の値上げはそういう例だ。

しかし、合理化は「国民の利益」を侵すよりまえに、まずオーに「労働者の利益」を侵すものであることは全く明らかではないか。

資本家が、賃金奴隷として労働者を支配する資本主義社会では、合理化は労働者の搾取の強化以外にはあり得ない。

合理化の眼目は、新しい設備を入れることにあるのではない。新しい設備を導入して、労働者をそのもとで働かせること、資本家に

とってよりよく働くことにある。

五ヶ年計画は何故に立てられたか。

それは国鉄が、日本資本主義の急速度の発展におくれないために、そして新しく競争手として登場しつつある自動車、航空機との競争戦に耐えぬくために、戦後の復旧のたちおくれを一気にとりもどし、基幹産業としての位置を確保するために立てられた。

国鉄は昭和24年に運輸省から分離し、公社となり、予算の一般会計からの援助を打切られた。

日本資本主義の発達のなかで、その重要な力ナメとして、国家の直営機関として、国家財政を投入して建設、増強された。

しかし、戦後の日本資本主義の復興過程において、国家投資は第一に鉄鋼、石炭などの部門に集中され、国鉄は独占資本の直接の利潤追求の対象とされず、第三義的な位置におかれた。

公社となった国鉄は、自己資金の蓄積のための必死の努力を開始した。

これが五ヶ年計画の背景だ。

五ヶ年計画は国鉄の徹底的「近代化」と採算向上をめざしている。

労働者にとってはそれは、徹底的な労働強化と首切り以外の何でもない。

労働者にとって必要なことは、この合理化の本質をおしいかくさずバクロすること、そして、労働者の利益を守る以外に「社会の進歩」を考えたりしないで、たいかいぬくことしかない。

ところが、起っているのは次のようなことだ。

(3) 新宿駅で起ったこと

中央線の貨物輸送の合理化のために、新宿駅での荷物の扱いを上り線にかぎり、下りは立川、国分寺に移すことによって、新宿駅の貨車扱いを配転し、三交替制を二四時間勤務にすること々、六月から問題とされていた。

九月十日実施をひかえて、三日の非番者職場集会では、今度は実力でヨウ、という方針を決めた。ところが、分会執行部のなかの民同は、翌日の非番者集会のまえにオル々し「斗わなければ合理化は八人ですむが、やれば十六人になる」「処分が出るなら分会にではなく、組合員にでる」と云ってまわり、それでも非番者集会では、処分が出てもやらなくては仕方がない」と云って、結局、斗争を新橋支部一任にしてしまった。

支部では、七日に、地本、分会の役員が団交した々、当局に二撤され、次回は九日と決めて帰えった。

ところが、東京地本の谷合業務部長は「六日は新橋支部大会の前日だから」と云う理由をつけて、八日に勝手に団交に行き、支部にも分会にもはからずに、とりきめ合理化を受入れてしまった。

十日の実施は二五日が同来にのぼされている々、職場には不満という以上のヤケな気分々あり、組合費などバカらしくて払えるかという労働者が多く出ている。

新宿駅、新橋支部は、いわゆる民同の完全支配が出来ている場所ではない。革同が一定の影響力をもっているところだ。

こんな例はほんの一例であり、何百回もくり返された斗争の一つだろう。

しかしこうした斗争の経過と正しいバクロは行なわれていない。

(4) 品川の教訓・電務区合理化反対斗争について

☆ 田端に出た合理化

田端電務区で八九名の婦人労働者が電話中継機を操作している。ここに新しい機械を入れて合理化する計画が、八月に具体的に示された。

電務区の合理化は、すでに全国主要電務区ではすんでしまった。

そして、田端にも合理化が来ることは、中斗・地本・支部には前からわかっていた。しかし、二のときまで田端には、具体的な斗争の準備も、これまでの斗争の教訓も入らなかったので、当局の新機械導入后の青写真を見て、田端の労働者は休憩室の二〇ぢょうから八ぢょうへの縮少、機械の二〇台から五台への減少という事実を知ってから、今会議をはじめ、ビラを皆で電務区内一体にはった。

青写真から計算すれば八十九名が三十名以下になることは確実なので、「くびきり、配転反対、一人も職場を動かない」がスローガンであり、一昨年斗争をして『強制配転はしない』という協定をとった品川電務区斗争が手本だった。

☆ 品川の斗争

品川電務区の斗争は、電務区斗争の「勝利」の例だということになっている。

事実はどうか？

品川は、一昨年六月から電務区・合理化反対の最初の斗争を、新潟・札幌とともに斗った。（それまでの合理化は、強制配転を含んでなかったので反対斗争がなかった。）五七年六月に計画が明らかになり、九月着工ということがわかった。会社は直ちに職場討議をはじめ、地本に指令を要求しつつ、ビラハリなどの斗争をはじめた。

ところが、地本は、「十月斗争を待て」ということだけで、その十月斗争は結局斗われないで終ってしまった。工事の準備は着々とすすめられ、二階建を三階建にするための足場が組まれようとした。

分会はこの合理化の第一着手を実力阻止の方針を出し、三日間にわたって工事を阻止した。足場を組む予定は三日間なので、この斗争で計画が完全に壊れようとしたとき、三日目に地本の指令が下りて、合理化の技術的な問題について話し合うという「合理化事前委員会」を東鉄管理局と地本の間に設置して話し合うということを条件に斗争中止を指令し、斗争はこれで終りになった。事前委員会は団交延期のスクリーンなのだ！

事前委員会で結局強制配転しないという協定が出来、工事は去年九月に終った。このあと、必ず電務区の合理化は事前委員会でまず検討することになり、事前委員会は品川斗争の成果と言われることになった。

しかし、品川では事前委員会は、団交が開けないのごやむを得ず作った機関であり、正式の権限をもたない話し合い機関で、斗争のために役立つ機関ではなく、基本的には団交を開かなければならないのだ、ということは明瞭だ。専門委員会は品川で斗争を打ち切らせたのだ。

☆「絶対反対」をめぐる論争

品川の成果は、決して専門委の話し合いによって得られたのではない。

工事阻止の斗争だけが強制配転阻止をかちとったのだ。

斗争の過程のなかで、また斗争が終ったあとで「合理化絶対反対」という分会の方針にたいして、「絶対反対など出来ないし、実際に出来なかった。だから条件斗争でなければならない」という条件斗争でなければならない」という文句が出された。

しかし「絶対反対」というのは、合理化の本質を把握した労働者の基本的な態度・戦術であって、機械が導入されたか否かの結果から判断されるべきものではない。

資本主義の下での合理化が、本質的に労働者の搾取の強化であり、必ず労働条件の切り下げを引き起すから反対なのであり、労働条件の切り下げを、功利主義的に、という立場で斗うなかでの条件もかくとくされる。

はじめから条件斗争にすれば、条件が一部を入れ、ば斗いは容易にくずれる。労働者の斗争力を徹底的にひき出して、労働条件改善を完全にかちとることは出来ない。結果からの判断と云業の戦術で、「条件斗争」を持ち出すものは、結局斗いを弱めるものだ。

☆ 何が必要か

「強制配転はしない」という協定は、今年の春まで守られた。しかし、希望配転や選転などで三才四名まで入ったとき、地本の谷合業務部長は、当局が電務課係員をつれて来て、定員を一七名

に決定したといえばより報告した。分会では怒って地本に抗議にいったがあとのまつり、結局今では一七名定員、残り一七名は庶員外ということになっている。

これが「勝利した」品川斗争の実際だ。

この斗いについては、民同の間で「勝利」として宣伝されているが革同、意識的活動家の間では、昨年の産労日報二月号に紹介があっただけで、総括も批判も何も行なわれていない。

新宿駅のウラギリが行なわれた直后、社青労同がウラギリの事実をバクロするビラを駅に入れた。ビラは絶大な反響をよび、民同の分会委員、分会業ム部長は分会でつるし上げをくった。しかしそのとき、一部の革同と思われる労働者は、社青労同に「こんなビラをまいて組合不振をあおるな！　組織の分裂を進めるのか！　民同からおれたちがきいたように云われるからやめろ。」とくってかかった。

たしかにどんな場合にでも執行部を批判したり、民同に文句をつけたりしかしないとすれば、それは労働者の利益を売るやり方ではない。

しかし、斗争の際にはその先頭に立ち、そして斗争の中でウラギリが、意識的に系統的に行なわれるならそれをハッキリと組合員にバクロすることが、どうして「組合不振をあおる」と非難できるか！

「組合不信をあおるしものは、こうしたウラギリをあいまいにしておくこと、その責任と組合のとるべきであった正しい態度を明らかにすることをしないものによっておこるのだ。

敵の大合理化攻撃を前にして、口先労組の自覚した労働者に必要なことは何か？　組織を守り分裂を防ぐことか？　否!!

敵の攻撃の本質を明確にバクロし、偽装労働者の利益を売る斗争方針を提示し、そのもとに斗いを組むこと、これ以外には何もない。ただそのことによってのみ、組合不振は拭われ、組合の斗ラカはひきだされるだろう。

そのためには、自覚した労働者の頭から誤まる非階級的「統一」と因結論」を一掃し、彼らを革命的友愛思想のもとに結集すること、そして妥協排撃のもとに、正しい戦術をもって統一した宣伝、煽動、バクロを行ない斗いをくむこと、これが必要だ。

全日労の、動力車労組の兄弟よ、共産主義者同盟に結集せよ！

合理化斗争の決戦を勝ちぬくために準備せよ！

十月二日、志賀斗争の決戦を実力で支援せよ！

資本家の帝国主義的強化、安保改定のたくらみに、満車をぶつけて斗い佐藤政府を打倒せよ！